

カナダと新渡戸稲造

要 猿谷

各方面の指導者にはかり知れない思想的な影響を与え、長い鎖国からめざめた日本の国際関係を促進させた新渡戸博士は、日本の近代史上に偉大な足跡を残したが、その博士が七十二歳の生涯を閉じたのは、生れた国の日本ではなく、また何度も訪れた妻の国アメリカでもなく、カナダのヴィクトリア市ジュービリー病院の一室であった。

彼は一九三三年八月二日、第五回太平洋会議（Fifth of Pacific Relations）に日本の代表として参加するため、随員たちと一緒に横浜を出航した。

長年の友だった内村鑑三は、一九三〇年にこの世を去っていた。三一年には満州事変が、三二年には上海事変や五・一五事件が起り、日本の大勢は不幸にして彼のめざす方向から遠ざかるばかりだった。その上、三三年三月には、かつて彼が七年間も事務局次長を勤めていた国際連盟から、日本は脱退してしまったのだ。

こういう客観的な情勢を考えると、国際平和を願っていた新渡戸博士のその時の気持は、今でも察するに余りがある。博士の親友宮部金吾は、次のように書いている。

「昭和七年（一九三二）二月、君は急転する時局を深く憂えていましたが、松山市に講演旅行をした際、新聞記者を含む来訪者との宿舎での私的会見において、『日本を亡ぼすものは共産党か軍部であろう。』という意味の憂慮を述べられたとの報道が広まり、その後しばらく軍部関係、在郷郷人等の団体から圧力が加えられました」

私は今までにたびたびアメリカで、「第二次大戦前の日本には反戦思想家が育た

なかったのか」という質問を受けたが、いま私が仕事をしている東京女子大学の初代学長だった新渡戸博士が、その稀な存在だったことに対し、私は国際的なレベルでの誇りを感じている。

一九二四年にアメリカで排日移民法が成立したときには、もう一度とアメリカの土は踏まないといつてアメリカの反省を迫った博士も、国際的に孤立化した日本の立場を理解してもらったため、三二年四月から三三年三月まで、アメリカの各地で百回をこえる講演を試みる。そして休むまもなく、今度はカナダへ向けて出発したのである。

博士は多忙な身でありながら、当時『英文毎日』に『Pan-Pacific Longing』を連載していたが、一九三三年九月九日付には、次のような部分がある。

「欧米の人びとに対して、日本の必要と念願をよく伝える。弁解は一切無用だが、事実を正確に説明する。中国人に対してはとくに親切にし、彼等を追いつめないようにする。誠実・気転、そして忍耐」

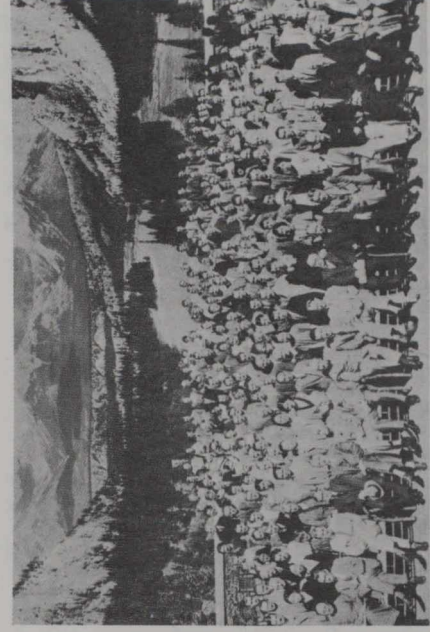
カナディアン・ロッキーマウンテンの美しい山々に囲まれた町バンフで行なわれる第五回の太平洋会議に、博士は大きな期待を抱いていた。京都での第三回会議には議長として、上海での第四回会議には日本代表として、いつも重要な役割を果たしてきた博士は、この民間の会議を、国際連盟と比較するほど大切なものと考えていたのである。

それでは、この会議での博士はどうだったろうか。随行した高木八尺は、身近に見た博士の様子を、次のように書いている。

「しかし先生は、バンフに御到着の前夜、

汽車のなかですでに一度激烈な腹痛に襲われておられました。御到着の日は大会開会の当日であつたため、実に寸暇もなく、その並々ならぬ疲労をおして、先生は日本側委員長として、またその夜の選ばれた演説者の一人として、見事なお働きをなされました。まことに会合が優れた人の集まりであればあるほど、先生の光は輝きます。かけがえのない太平洋会議の中核人物でありました。……今から思いますれば、しかし、先生はバンフ

バンフでの会議（一九三三年）の参加者。前列右から九番目が新渡戸博士。（新渡戸稲造全集第一六巻より）



会議の間何となく、いつもの溢れるお元気がありませんでした。それが、私の生きた先生におめにかかった最後でした」

もう一人、副島道正の追悼文のなかから引用してみよう。

「バンフの太平洋会議における博士は、失礼ながら満点であつた。氏はこの会議

において、大いにわが国威を宣揚したのである」

しかし、死はすでに彼の足許にまで迫っていた。身体の不調を知った博士は、会議のあとヴィクトリア市で静養したが、九月十一日激しい腹痛に見舞われ、意識不明のままジュービリー病院に入院する。

『太平洋の橋』のなかで、石上玄一郎はこう書いている。

「痛みはなおも続いて、すぐ面会謝絶になった。四、五日たつて『くず湯が飲みたい』というので持つていくと、新渡戸はスプーンをよく持つことができなくて、それがバタリと床に落ちた。……だが、文筆家の執念とでもいうか、そのスプーンを持つことさえおぼつかない手に鉛筆を握って、死のまぎわまで『英文毎日』の原稿を書き続けたのである」

病名はなかなか分らなかつたという。病気のためアメリカで静養していたメリー夫人もかけつけ、十月十五日に手術を受けた結果、脾臓腫瘍という大変厄介な病気であることが判明した。

経過は一時良好のようにみえたが、その後病状が急変し、同日午後八時半に、その魂は天に昇った。病院では、非の打ちどころのない立派な患者だった、と認めている。

太平洋の架け橋になりたいという博士の遺志は、日加両国にとつても、これからはますます大切に生かさなければならぬ。いまブリテイッシュ・コロンビア大学の構内にある美しい日本庭園ニトベ・メモリアル・ガーデンは、彼の遺志を生かそうとする日加両国の意志の結晶といえるのではないだろうか。